



海外 稲門会の躍動

Overseas TOMONKAI

会長メッセージ

インドのムンバイは北緯約19度(ハワイ島、海南島と同じ)でインドの西岸に位置し、アラビア海に面したインド随一の経済・商業都市かつ世界で一番映画を製作する文化・芸能都市です(町の旧称ボンベイからハリウッドとも呼ばれています)。

このムンバイに2015年3月に設立されたのがわがムンバイ稲門会です。ムンバイは南北に細長く、邦人の住む地域も分かれていて、平日頃連絡を取り合うのも難しい環境でしたが、口コミでOB、OGを手探りで見つけてここまでできました。現在の会員数は25名と、さらに既に帰国された方々がムンバイ稲門会東京支部(校友会非登録)を立ち上げ、6,700キロメートルの距離を超えて交流があります。

懇親会、早慶対抗ゴルフや合同懇親会を通じて、「緩く楽しく」がモットーの稲門会の盛り上がりも極まり知らず、ムンバイ近郊のブネ市のOB、OGとの交流も画策しています。いくつかの離れ小島が埋め立てられ今の大都市ムンバイに成長したように、われわれムンバイ稲門会一同が結束して早稲田魂の発露に努める日々を送っています。訪印の際はぜひお声掛けください。

土屋雄司(1990年教育)



ゴルフ早慶戦で勝利!

会員からのメッセージ

ムンバイに来て2年弱ですが、日本で働いていたころより、強く校友の繋がりと素晴らしいさを感じました。在住日本人は650人ほどという、ムンバイの小さな日本人社会。多岐に渡る業種、短期から長期まで、各々のミッションでムンバイに来て働いている人々にとって、こういった繋がりはただの余暇ではなく、心のよりどころにすらなるのです。性別年代問わず集まり、新しい企画や仕事、生活での気づきが生まれ、回を重ねるごとに稲門会への参加者が増えていきます。ムンバイ稲門会のますますの拡大を期待しています。

佐野真理(2007年商学)

歴史が積み重なる場に臨む高揚感、未知の世界への畏れ、そして新たな出会いへの期待。2015年初頭、ムンバイ赴任の命を受けて感じたのは、大学入学を待つ日々と似たような思いだったかもしれません。公私ともに「まさか」の連続に翻弄されるムンバイ生活ですが、何事にも動じない先輩方、バイタリティー溢れる後輩の皆さん、そして同世代のメンバーとの稲門会での交流で心の乱れを回復しながら、今はここが自身にとっての「野」と覚悟を定めて過ごす日々です。

市川康太郎(1993年法学)

インドのムンバイに赴任して1年半。水を飲めばお腹を壊し、空気を吸えば喉が痛くなり、そこら中にゴミが落ち、人間、牛、犬、ハトがひしめきあい、常にクラクションや太鼓の音が鳴り響く環境はお世辞にも暮らしやすい国とは言いがたい。そんななか稲門会の皆さまと集まり、インドの苦労話を一緒に笑い飛ばしていると、「よし! 明日からも頑張ろう」といつも元気をもらう。大変なことが多い分、インド人とも日本人とも人の繋がりが濃くなる国である。

小島茉莉李枝(2007年教育)

あらゆる物事が日本と大きく異なるムンバイの地で、共にインドの経済を盛り上げようと頑張っている在留邦人との繋がりは、自身の力の源となっています。私は赴任後すぐにムンバイ稲門会に出会い、生活ノウハウからインドでのビジネスのことまで、ここムンバイの地でも、「WASEDA」の先輩方から多くのことを学ばせていただいています。懇親会のあとは、学生時代のように校歌を歌って大盛り上がりで解散し、次の日から頑張ることができるのも「WASEDA」の繋がりがなくては感じています。

鈴木大岳(2013年文構)

ムンバイ稲門会について

ムンバイ稲門会は2015年3月より定期的に会合を開催し始め、同年8月に校友会公認の稲門会となりました。2016年1月現在で登録会員数は25名と、少ないながらも老若男女がアットホームな雰囲気です。今のところイベント開催の頻度はおよそ2カ月に1回。いろいろと娯楽に制限の多いムンバイですが、懇親会があれば『紺碧の空』や校歌を皆で熱唱し、ムンバイ三田会と合同懇親会やゴルフ早慶戦を行うなど、ライバルとの古き良き伝統を紡ぎ、学生だったあのころと何一つ変わらない早稲田魂をこの地で燃やし続けています。

平松大知(2013年国際教養)



懇親会

ムンバイの魅力

在学中の2004年、夏期のインドを3カ月で一周しました。そのとき芽生えたインドへの不思議な愛着が忘れられず、インドを希望してムンバイに赴任するご縁をいただきました。12年前と比べ、ニューデリーは地下鉄が通り、物乞いは中心部から消滅し、日本食も溢れ、隔世の感を禁じ得ません。しかし、ムンバイは慢性的な交通渋滞、溢れる路上生活者、レストランはまだインド料理が中心という、インド経済の成長をなかなか感じ難い環境です。街の風景が変わったのはスマホの広告だけ、というのは言い過ぎでしょうか。

ただ、ハリウッド映画など、当地がインドの「東西古今の文化の潮」であることは間違いなく、クラブで外国人と共に体を揺らす若者、古い建物をリノベーションしたレストランをつくりインドの歴史と現在を繋げる起業家など、とかく保守的な巨象を変えようとする波も所々で感じられます。

人懐っこい表情で寄ってくる子どもたち、アラビア海を眺め続ける老若男女など、異なる時の流れ、価値観で生きている人たちと、心のハードルを下げておけば自然と触れ合うことができます。そんなおおいなる田舎町の魅力を多くの方に堪能していただきたいと願っております。

堀口昇吾(2005年法学)



1.ビーチに集まる人々
2.ムンバイを代表する高級ホテル・タージマハルホテルとインド門

1.牛はどこにでもあります
2.世界遺産・エレファンタ島の石窟群